

書 評

橋本 彩. 『ラオス競漕祭の文化誌—伝統とスポーツ化をめぐる』めこん, 2020 年, 286 p.

中田友子*

本書は、著者が 2014 年 10 月に早稲田大学大学院人間科学研究科に提出した博士論文『ラオス競漕祭における「伝統」と「スポーツ」の関係—ヴィエンチャンの事例から』を加筆・修正したものである。正直に言えば、本書を手にするまで評者はラオスの競漕祭を「スポーツ」ととらえたことがなかった。それは、評者がラオスで競漕自体に参加する人びとと接したことがなく、観衆として祭りを楽しんでいる人びとしか知らないことと、著者が本書で批判的に検討しているアルシャンボーの研究によって先入観を、そうと自覚しないままつくられていたためだろう。ラオスの競漕祭を主要テーマとする先行研究として、評者が知る限りではほぼ唯一のアルシャンボーの研究は、著者の指摘どおり、儀礼的な側面が関心の中心にあり、漕ぎ手とその実践にはほとんど言及していない。したがって、スポーツという視点は完全に欠落しており、その意味で、本書の視点や設定した課題が新しいものであることに疑問の余地はない。

本書の目的は、「ラオス・ヴィエンチャンの競漕祭を対象とし、競漕祭が社会との相互

作用の中でどのような歴史的変容を経て、現在の状況に至っているのかを明らかにする」(p. 13) ことであり、問題意識の中心にあるのは、競漕祭の歴史的な変化である。ただし、これに加えて、スポーツ人類学という位置づけをもつことから、「文化史」ではなく、「文化誌」というより幅のあることばを選択したのだらうと考えられる。著者によると、スポーツ研究では、「伝統スポーツ」が「近代スポーツ」「国際スポーツ」に対して下位に置かれる傾向があるものの、他方で「民族スポーツ」という概念により、文化の多様性や個性を尊重すべきという立場があるという。そこで、ラオスの競漕祭をとりあげ、「非西欧社会における『伝統スポーツ』の動態を例証すると共に、ラオスの他地域とは歴史背景が異なるヴィエンチャン地域における競漕祭の個性を考察していく」(p. 37) と述べられている。さらに、スポーツ研究の先行研究を検討したうえで、本書では、競漕祭がラオスの国内政治と国際社会との関係のなかで、「近代スポーツ」と「伝統」というカテゴリーの間で揺れ動く様が描かれており、この点でスポーツ人類学への寄与が意図されている。

本書は、時代をフランスによる植民地統治が始まる 1893 年から、著者が調査を行なった 2009 年までに限定し、時代に沿って競漕祭の変化を解き明かしていく。序章では、主な資料として、植民地時代のラオ語新聞、仏語新聞、1975 年のラオス革命まで刊行されたラオ語日刊紙、そして革命後の日刊紙を用いたこと、また 2004 年、2005 年の予備調

* 神戸市外国語大学

査の後、2006年5月から2007年12月までヴィエンチャンで調査を行なったと述べられている。これに続いて、ヴィエンチャンの歴史・地理・文化背景について概略的な説明があり、そのなかで、現在のラオスの首都ヴィエンチャンが歴史的にいかに大きな断絶を経験しているかが明らかにされる。すなわち、ヴィエンチャンは、1827～28年にシャム軍によって完膚なきまでに破壊され、住民のほとんどはシャムへと強制移住させられ、フランス人が19世紀後半、この地に足を踏み入れたとき目にしたのは完全な廃墟だったのである。フランスはかつて首都であったこの地に現地長官の住居を建て、首都として再建していくのだが、断絶を経験した伝統の再構築がいかに困難であるか、著者は続く章で描きだしている。というのも、競漕祭はラオの人のびとの精霊信仰と切り離せないものであり、これにまつわる儀礼は本来、不可欠な要素なのだが、いったん途切れた伝統や慣習実践は完全には取り戻すことができない。以下、順を追って各章の内容を紹介する。

第1部「フランス植民地政府の影響下で創造された競漕祭」、第1章「ラオス刷新運動期の競漕祭とスポーツ（1893年～1945年）」では、上記のようにいったん途絶えたと考えられる競漕祭（ワット・チャン競漕祭）が、フランス植民地政府のもとでどのように復興、著者によれば「創造」されたかが新聞記事をもとに述べられている。その背景にあったのは、歴史的に大きな影響力をもっていた隣国タイの「大タイ主義」にラオスのみ込まれるのを防ぎ、フランス植民地とし

てのラオスの独自性を強調するための「ラオス刷新運動」と呼ばれる文教政策であった。著者は、もともと出安居祭の一部として開催される競漕祭であるにもかかわらず、出安居祭に関する記述が1940年代以前にほとんど存在しないことから、この祭りがラオス刷新運動の一環として創造され、これが毎年開催されることで「慣習」、「伝統」として定着したのではないかという見方を提示する。その一方で、フランス本国の当時のヴィシー政権による国家体制強化を目的とするスポーツ重視の政策の影響を受け、植民地ラオスでも人びとの管理統制を目的としてスポーツが奨励され、「スポーツ」という単語にラオ語の「キラーkila」という語があてられるようになったが、この時代はまだ競漕祭はスポーツとはみなされてなかったと述べている。

第2章「競漕祭に付随する儀礼と守護霊の召喚（1953年～1964年）」では、1945年の日本による仏印処理から、1953年までは資料がないため除かれ、ラオス王国独立後の時代に関し、新聞記事にもとづいてアルシャンボーによる競漕祭の研究に対する批判的再検討を中心に議論を展開している。そして、著者は、1953年以前にはヴィエンチャンの競漕祭の研究が存在しないこと、またアルシャンボーが自身の調査をもとに記述し分析しているヴィエンチャンの競漕祭で行なわれた儀礼が明らかにルアンパバーンの影響を受けていることなどから、ラオス人の「伝統文化」を再生・復興するシナリオの一部として、これが「創られた」のではないかという仮説を提示している。

第2部、第3章「伝統スポーツ概念の登場（1965年～1974年）」では、内戦状態にあったラオスで、競漕祭が敢えて開催され、むしろ王族が参加するなど盛大になっていったことが明らかにされている。著者はそのなかで、「伝統文化」としての競漕祭という語りが強化される一方、競漕祭の結果がスポーツニュース欄に掲載され、競漕に関する規定が細かく策定されたことから、「スポーツ」としての扱いが定着していき、やがて、両者を対立させることのない、「伝統スポーツ」という用語が生み出されたと述べている。

第4章「団結と国家繁栄のための競漕祭（1975年～1999年）」では、1975年、ラオス人民革命党が社会主義国家を建国して以降、仏教行事がマルクス主義イデオロギーのもとで禁止された一方、競漕祭は伝統的慣習のひとつとして振興されるとともに、国民の団結力を促進する「スポーツ」ととらえられ、さらに競漕が、国家スポーツ競技会の競技種目のひとつとなり、人材育成と身体文化の促進に貢献できるとみなされることで、スポーツの要素が強化されることになったと述べられている。他方で、外国人観光客を受け入れはじめ、観光資源としての伝統文化を重視するようになったことで、競漕祭の儀礼的側面の喪失を惜しむ声もあがるようになり、国際大会の競技種目となったスポーツとしての競漕と伝統文化としてのそれとのバランスが図られるようになったのである。

第3部「21世紀の競漕祭における伝統論争」、第5章「伝統をめぐる地域間の駆け引きと舟に集約される『伝統』」は、主に著者

が行なった現地調査にもとづいて、2000年代以降の舟の形状をめぐる論争をとおして、スポーツと伝統文化、どちらの側面を強調するかに関するせめぎあいを描いている。ここでは主に、舟の伝統的な形状だけでなく、競漕に参加する前に村レベルで行なわれる儀礼も伝統の要素として描かれ、こうしたローカルな儀礼が維持・継承された一方、ヴィエンチャン地域を守護するナーガへの儀礼祭祀は継承されなかったと述べられている。

終章では、全体をふりかえるとともに、伝統舟とは異なる「スポーツ舟」として理解されている「フーア・スード」が、ヴィエンチャン地方最大の競漕祭であるワット・チャン競漕祭に参加し続けていることから、現在、スポーツとしての重要性が明らかである一方、人びとは競漕祭の何が「伝統」であるかを解釈するプロセスをとおして、これを「伝統化」してきたと述べている。

以上、本書の内容を概観したが、一読して最も強く感じたのは、当該地域の歴史をたどることの困難さであり、そして敢えてこれに挑戦した著者の果敢な姿勢である。19世紀前半のシャムによるヴィエンチャン襲撃の際、多くのテキストも焼き払われたようであり、歴史的な再構成は困難を極める。本書の文章には頻繁に、「…と考えられる」「…可能性は十分にある」といった表現が使われており、違和感を抱く読者もいるかもしれないが、ある程度事情を知る者にとって、このような表現は致し方ないものと思われる。むしろ、資料の大きな制約がありながら、先行研究の限られた競漕祭を、ラオス国内の政

治・社会情勢のみならず、フランス政府の状況や隣国タイとの関係なども視野に入れ、描きだしたことは高く評価できるだろう。ただ、評者がひとつ疑問に感じたのは、フィールドワークの聞き取りが、2007年時点の状況に限られていることである。インフォーマントのなかに、たとえば、1960年代、70年代について記憶がある人はいなかったのだろうか。記憶の扱いには一定の注意が必要であることは確かだが、人びとの記憶と新聞記事の内容とを照らし合わせれば、当時の状況に関する分析と考察により厚みが増したのではないかという思いを、部外者の安易な期待では、と自戒しつつも抱いてしまうのである。余談になるが、植民地時代について、エクサンプロヴァンスのANOM (Archives nationales d'outre-mer) にある公文書等の資料のなかに、何か新しい発見があるかもしれないので、機会があればぜひ、調査することをお勧めする。

阪本公美子、『開発と文化における民衆参加—タンザニアの内発的発展の条件』
春風社、2020年、520 p.

中澤芽衣*

「その地域に根付く文化が、発展を阻害する。」

果たして、このことは本当に正しいのか。著者は、タンザニアで国連職員として働いていた際、アフリカの地方政府高官をはじめと

したエリート層によって「文化が開発・発展の障害となる」と語られることに、違和感を抱いたという。この違和感を出発点として、著者は地元の文化と調和した開発のあり方を探求するべく、タンザニア南東部リンディ州をフィールドとして研究に取り組み、その成果をまとめたのが本書である。本書は520ページにわたる大著であり、開発政策の歴史的変遷や文化の概念だけでなく、タンザニアの自然環境やスワヒリ文化の創出過程など幅広い内容を扱い、学際的な視点から開発と文化の諸相について論じている。本稿ではその内容の一部を抜粋しながら、紹介していきたい。

本書は、第I部「タンザニアにおける開発と文化を再考する」と第II部「タンザニアにおける内発的な視点に基づく社会開発」の2部で構成される。序章では、先述した著者の本書執筆の動機と意義について触れられている。その後、主要な用語である開発・発展、文化、参加について詳説される。最後に、研究対象地域であるタンザニア南東部リンディ州と研究方法を簡単に説明する。

第I部では、開発と文化という2つのキーワードを取り上げ、それらの関係性（対立もしくは調和）について再考される。第1章では開発概念の歴史的な変遷を追ったあと、文化の位置付けに関する文献レビューをおこなう。まず開発の起源に触れ、時代ごとの開発の特徴とその変化について、4つの時代（1950～60年代、1970年代、1980～90年代、2000～10年代）に分けてまとめている。これまでの開発政策を見返すと、経済成長が中

* 高崎経済大学地域政策学部